

ロシアにおける「聖ゲオルギオスの竜退治」伝説 —巡礼霊歌・イコン・聖者伝（Ⅰ）

伊 東 一 郎

1. はじめに

東西ヨーロッパの民衆文化における聖者崇拜はこの地域に広く見出される現象である。そこで崇拜の対象になっているのは東西教会共通の聖者およびそのそれぞれの伝統（カトリック及びプロテスタントと東方正教）に固有の聖者であるが、東西教会に共通の聖者の中で特に民衆の間で根強い信仰をあつめてきたのが聖ゲオルギオスである。また聖ゲオルギオスは早くから東方で信仰の広まった聖者で、その聖者伝にはギリシア語、ラテン語のもののほかシリア語、コプト語、アラビア語などの写本がある [Budge 1930]。

聖ゲオルギオス崇拜が東西ヨーロッパで顕著に見られるのには大きく二つの理由がある。一つには有名な竜退治の伝説と、それを画題とした宗教画の流布である。二つには教会で定められた4月23日という聖ゲオルギオス祭がヨーロッパの民間暦で重要な意味を持っていることである⁽¹⁾。

本稿で取り上げようとするのはこの聖ゲオルギオスの竜退治をテーマとしたロシア・フォークロア、特に巡礼霊歌であり、その目的は、巡礼霊歌に表現された聖ゲオルギオスのイメージとその源泉である聖者伝および、これを画題とした視覚芸術であるロシア・イコンにおけるそのイメージがどのように影響しあっているかを考察することにある。

2. 『黄金伝説』における聖ゲオルギオス伝説

2-1 『黄金伝説』における聖ゲオルギオスの殉教伝説

まず東西教会に流布する聖ゲオルギオス伝説の標準的なものとして、13世紀に編まれたヤコブス・デ・ヴォラギネの『黄金伝説』が伝える聖ゲオルギオス伝説を紹介しておく。聖ゲオルギオスはカッパドキア出身のローマの軍人で、ディオクレティアヌス帝とマクシミアヌス帝のキリスト教徒大迫害の際に、度重なる拷問にも耐え、奇跡的に生き抜き最後にディオスポリスという町で303年頃斬首されて殉教したとされる。

ただし迫害を指揮した裁判官ダキアヌスは、別の伝承によればペルシアの皇帝とされているし、殉教したと言う「ディオスポリス」という名の都市も、この時代あちこちにあり、同定できない。

ある典拠では、テルアヴィヴ＝ヤッファの南東18キロにあり、現在ロドと呼ばれている町が、ゲオルギオスの殉教したディオスポリスであるとされている。いずれにしてもルツダとも呼ばれたこのパレスティナのディオスポリスとカッパドキアでは早くから聖ゲオルギオス信仰は少なくとも6世紀にまでさかのぼる〔ヤコブス・デ・ヴォラギネ 1984: 80-84; Веселовский 1880: 29〕。

この聖ゲオルギオスの殉教伝説は、325年に開かれたニカイア公会議では外典とされた。『黄金伝説』の著者ヤコブス・デ・ヴォラギネは、これをこの聖人の殉教に関する正確な記録がなかったため、としているが、実際には、その伝説にこの会議で異端とされたアリウス派的な粉飾が施されていたためらしい〔ヤコブス・デ・ヴォラギネ 1984: 85 (訳注)〕。いずれにしろ民衆における聖ゲオルギオス崇拝は衰えなかった。9世紀初めに総司教ニキフォロスがもう一度禁令を出したことからもそれは伺える。

2-2 『黄金伝説』における竜退治伝説

次に本稿で取上げる竜退治を扱った第二の伝説は、11世紀に付加されたものらしく、その内容は、『黄金伝説』によれば次のようなものである。

あるときリビアのシレナという町の湖に毒をもった竜が住みつき、その毒気で町に悪疫をはやらせた。そこでこの竜をなだめるために市民たちは毎日二頭の羊を与えていたが、羊の数が足りなくなって、毎日人間ひとりと羊一頭を竜にささげることになった。いけにえとなる人間はくじで選ばれていたが、とうとう王の一人娘にくじが当たりいけにえにされようとした時、たまたまそこへ聖ゲオルギオスが馬で通りかかり、竜をおとなしくさせ娘を救った。聖ゲオルギオスは娘に帯で竜をつないで、町の前まで連れて行かせ、住民が洗礼を受けることを条件にこの竜を殺した。二万人の人々が洗礼を受け、国王は聖母マリアと聖ゲオルギオスのために教会を建てた。すると祭壇から清水が湧きだして、この水を飲んだすべての病人たちは、たちまち健康になったという〔ヴォラギネ 1984: 76-80、85-88〕。

さてこの竜退治の伝説は、すぐにアンドロメダとペルセウスのギリシア神話を想起させる。オヴィディウスの『転身物語』によれば、ペルセウスが怪物を退治してアンドロメダを救ったのは、同じリビアにおいてであった。また別の伝承では、聖ゲオルギオスの墓があったとされるヤッファの近くともされている〔ヤコブス・デ・ヴォラギネ 85-86; ケレーニイ 1974: 68〕。このような地理的一致から、この聖ゲオルギオス伝説をペルセウス説話の主人公が聖ゲオルギオスに置き換えられたもの、と考えることも可能であろう。

3. ロシアにおける聖ゲオルギオス崇拝

これらの聖ゲオルギオスの受難伝説、殉教伝説はロシアに10世紀に公的にキリスト教が導入された後、既に11世紀にギリシア語から教会スラヴ語に翻訳された。同時にゲオルギオスの名は洗

礼名ユーリイとしてロシア人の人名に取り入れられ⁽²⁾、広まった。聖ゲオルギオス祭は東西の教会暦で4月23日に定められたが、ロシアではヤロスラフ賢公が自らの洗礼名に選び、秋の11月26日にもう一つの聖ゲオルギオス祭が定められた。このヤロスラフが公として最初ノヴゴロドを治めたため、ノヴゴロドでは特に聖ゲオルギオス崇拝が強く、その図が市の紋章にも用いられた。このようにロシアで広く崇拝された聖ゲオルギオスであったが、チホヌラーヴォフの『ロシア外典偽典文学』に聖ゲオルギオスの受難伝説（«Георгиево мучение»）が収められていることから、ロシアでも聖ゲオルギオス崇拝は公には禁じられていたことが伺える [Тихонравов 1863: 100-111]。

4. 中世ロシア語写本における「聖ゲオルギオスの竜退治」伝説

聖ゲオルギオスの竜退治伝説（「竜についてのゲオルギスの奇跡」«Чудо Георгия о змии»）は既に11世紀にギリシア語から教会スラヴ語に翻訳され、12世紀末から13世初頭に「二次的なロシア版」と呼ばれるテキストが現れた。そこでは物語の舞台の地名はギリシア語写本でラオディキヤと呼ばれている物語の舞台はゲヴァルという未知の地名に代えられている。ここに訳出するのは16世紀の写本によるテキストで、リュステンコの出版による [Рыстенко 1909: 36-42] ([Дмитриев, Лихачев 1981] に再録)。

「竜についての聖ゲオルギオスの奇跡」

父なる神よ、祝福したまえ！この恐ろしく、またあまたの栄光に満ちた神秘をどのように物語るべきか？ 何を申し述べ何に思いをいたせばよいのか？ 何故なら私は罪深い人間であり、聖大殉教者でありキリストゆえの受難を耐え忍んだゲオルギオスの慈悲を頼みにするものであるから。あなたがたにこの方のあらゆる奇跡の中でも最も玄妙なるこの奇跡を物語ろう。

かつて昔パレスチナの里にゲヴァルという名の町があった。それはきわめて大きくそこには多くの人々が住んでいた。住民はみな伝説と皇帝の命令に従い偶像を拝み崇拝していた。彼らは神に背き神は彼らを見捨てた。

町の傍には豊かな水を湛えた大きな湖があった。住民の信仰と行いに神は報いを与えた。この湖に巨大な竜が現われ、この湖から出てきてはこの町の住民を食らうのだった。あるものたちはその風を叫び声で殺し、またあるものたちは絞め殺し湖の中へ引きさらっていった。この獣のために町の哀しみはいと大きく慰めのない嘆きが広がった。

あるときこの町の全ての住民が集まりその皇帝のもとにおもむき言った。「我らはどうしたらよいでしょう。このままではこの竜のために我らはみすみす滅んでしまいそうです」皇帝は答えて言った「神々が私に告げた全てを話そう。このように考えてはどうだろう—私の番が来るまで、おまえたちの各々が毎日自分の息子か娘を順番に竜の餌食に差し出すのだ。

最後に私も一人娘を差し出そう」この考えは住民のすべての気に入り、彼らは皇帝に答えて言った。「真に皇帝よ、あなたの御心は神々のみ手の中に在ります—あなたにこのような名案をお授けになった神々を褒め称えましょう」そして帰ると最高指揮官から最も貧しいものに至るまで毎日自分の子ら、ある者は自分の息子のある者は自分の娘を激しく泣き叫びながら湖岸の竜に食べさせ、順番に皇帝の命令を実行した。竜は出てきて子らを連れ去り食らった。

全ての住民がその子らを差し出した後、住民は再びやって来て皇帝に言った。「王様、我らは皆自分の子らを一人ずつ我々の決めた順番で差し出しました。さてこれからどういたしましょう？」それに答えて皇帝は言った。「では私も我が一人娘を差し出すことにしよう。そしてそれから不滅の神々が私に明かしてくれる方策に従って取り決めよう」皇帝はその一人娘を呼び寄せ、緋色の着物を着せ接吻してさめざめと泣くと、竜の餌食にするためにそこに連れて行くように命じた。

聖大殉教者、キリストの信仰ゆえの受難者ゲオルギオス、死後も生き続けた、天帝に尊崇される大いなる戦士はあまたの奇跡に輝き、神のご意思により、滅びゆく我らを救い、我らの町をこの災厄から救わんとしてまさにその時その場所に、戦場から故郷に帰る途中の普通の兵士の姿で現れた。湖岸に娘を見とめると偉大な栄えある受難者ゲオルギイは娘に尋ねた。「娘よ、なぜここに立っているのだ？」娘は答えて言った「ここから立ち去ってください、あなた、酷い死に襲われぬ様にすぐに立ち去ってください」それに答えて聖ゲオルギイが言った「娘よ何を言うのか、ここに盗賊でも出るのか、それとも別の理由が？」娘は言った「ここにはこの湖に巢食っている恐ろしい竜が居るのです。あなた様、今は貴方をお願いするばかりです。お見受けしたところあなたは美貌と若さをお持ちで顔も輝き美しい。お願いです、ここからすぐに立ち去り、どうか酷い死にあわぬ様にしてください」聖大殉教者ゲオルギイは娘に尋ねた。「おまえはなぜここに逃げもせずいるのだ？」娘は答えて言った「自分のことをお話しすれば長いことになりましょう。今は竜がやって来て私と一緒にあなたを引きさらわないかと心配なのです」そこで娘に聖大殉教者ゲオルギイは言った「娘よ、私に真実を告げよ、恐れるな、私はおまえをここにおいてはゆかぬ」すると震えながら娘は答えた「わが主、ご覧になったでしょうか、この町は大きくきわめて美しく、全てが繁栄しています。それゆえに私の父もここを去りがたくこの町を見捨て難く思っています。ところがここに、この湖に大きく、いと恐ろしい竜が棲んでおりまして、多くの人々を餌食にしております。そこで住民たちは我が父である皇帝と共に取り決めをし、住民の各々が毎日自分の子らを竜の餌食にしまいました。とうとう順番が我が父である皇帝にもまわり、私はそのただ一人の娘ではありましたが、皇帝は自分自身の命令を自ら違えたくはなく、私を竜の餌食に差し出すように命じたのです。これがわたしの話のすべてです。あなたは竜が現われて

あなたを引きさらわないうちに、すぐにここから逃げて下さいませ。」

これを聞くと大殉教者でありキリストの信仰ゆえの受難者ゲオルギイは娘に言った。「娘よ、恐れるな！」そして神の僕〔であるゲオルギイ〕はその場で天を見上げこのように言った。

「永遠の命を保つ者、終わりも始まりも持たない、時と年月を、流れ行く日々の太陽を、夜を照らす月を創られた、聖なるその使徒たちに耳傾け、彼らにその聖霊を委ねた、全世界の神よ、あなたのふつつかな僕の言葉を聞きたまえ。そしてわたしに昔どおりの貴方の慈悲をお示しになり、この残忍な獣を私の足下に倒し、全ての人々があなただけが唯一の神であり、貴方のほかに神を知らないことを見、そして信じるようにさせてください」聖大殉教者ゲオルギイがそう言うやいなや空から声が響いて言った「ゲオルギイよ、奮い立て、おまえが希うなら、おまえの声は聞きとどけられよう」

と突然娘は叫んで言った「あなた、ここから逃げて下さい、ほらもう竜が風を切りながらやってきます」そこでキリストの信仰ゆえの受難者ゲオルギイが軽く飛びのくと、沸き立つ湖から巨大な竜が現われ、丸天井のようなその頭をあげ、底知れぬ深淵のようなその口を開けて叫びつつ聖者と娘に向ってくるのが見えた。だがすぐさまキリストのみしるし〔である十字〕を大地に書き付けると聖ゲオルギイは言った「神の御子イエス・キリストの名において酷い獣よ、降伏せよ。そして私の後について来るがよい」そしてすぐに神とキリストの信仰ゆえの大殉教者、受難者ゲオルギイの力によって恐ろしい竜の膝はくずおれた。すると聖大殉教者ゲオルギイは娘に言った。「おまえの帯と私の馬の手綱をとりそれで竜の頭をしばり、竜を引いて町にむかうがよい」娘はキリストの信仰ゆえの聖大殉教者ゲオルギイが娘に命じたことを行なった。そして娘の後からその恐ろしい竜は羊が屠られに行くように大地を這ってついて行なった。娘は喜び心楽しく竜をひいていった。

一方娘の父である皇帝と娘の母は、その日この娘のことを思いさめざめと泣き悲しんでいた。だが突然竜を引いてくる娘と、その前を歩む奇跡成就者にして聖大殉教者、受難者ゲオルギイを見てひどく恐れ戦き逃げ出した。するとキリストの信仰ゆえの聖大殉教者・奇跡成就者ゲオルギイは大声で叫んで言った「恐れるな！　もしもおまえたちが私が信じるキリストを信じるならば今自らの救いを見るであろう」皇帝は彼を出迎えて彼に言った「あなた様、貴方のお名前は？」彼は答えて言った「ゲオルギイという者だ」すると人々はみな声をひとつに揃えて言った「あなたによって信じます、唯一の全能の神とその一人子、我らが主イエス・キリスト、そして生命を与える聖霊を」すると聖大殉教者・奇跡成就者ゲオルギイは、片手を伸ばしその剣を引き抜き獐猛な獣の頭を切り落とした。これを全て目の当たりにし皇帝と全ての住民はすぐに彼のもとに来て神とその僕、大奇跡成就者ゲオルギイを賛美しつつ彼に祈った。そして皇帝はあまたの栄光に輝くキリストの信仰ゆえの大殉教者・受難者ゲオ

ルギイの名において教会を建てるように命じ、その教会を金と銀と宝石とで飾った。そして彼のために4月の23日に祈りを捧げるように命じた。

キリストの信仰ゆえの聖大殉教者ゲオルギイは、彼らが心から我らが主イエス・キリストを信じているという彼らの信仰を見届け、言った「おまえたちに主なる我が神の新たな奇跡、験と力を示そう」そしてこの教会が出来上がり、棟梁たちが仕事を終えた時、彼らにその盾を贈り、それを聖なる祭壇の上に懸けるように命じた。聖霊の力とみ業により信仰を持たぬものを信じさせるためにこの盾は常に誰にも支えられることなく今に至るまで空中に懸っている。いと栄光ある大奇跡成就者・キリストの信仰ゆえの殉教者ゲオルギイの驚くべき栄光に値する奇跡はこのようなものである。これらの秘儀が聖なる彼の名において為されただけでなく、同じ様に神はゲオルギイの祈りによって信仰をもって教会にやってくる者すべてに多くの癒しを施している。足萎えは歩けるようになり、盲人は視力を取り戻し聾者は耳が聞こえるようになり、悪霊に苦しむ者は解放され、いつも彼の奇しき業により大いなる喜びが溢れている。それゆえ我らも、兄弟たちよ、彼に倣いキリストの信仰のための聖なるいと栄えある大殉教者・受難者ゲオルギイの祈りによって我らも我らが主、イエス・キリストの慈悲により永遠の終りなき至福を受けるために慈悲深き神を褒め称えん。我らが主に父と生命を与える聖霊と共に今も永遠に世々に渡りあらゆる栄光と力があらんことを。 アーメン。

以上の「聖ゲオルギオスの竜の奇跡」を『黄金伝説』のそれと比較すると、いくつかの相違が認められる。第一に双方の奇跡譚の最後で、万人の病を癒した、という治癒の奇跡が語られるが、『黄金伝説』ではそれが聖ゲオルギオス教会の祭壇から噴き出した水で万人が癒された、という話になっているのに対し、中世ロシア語版では聖ゲオルギオス教会に来るものはみな癒された、という話が語られるのとは別に、聖ゲオルギオスの盾が中空に浮いたまま留まったというもう一つの奇跡譚が語られている点である。

4月23日に定められた聖ゲオルギオス祭は、広くユーラシア全体の民間暦において農耕と牧畜の開始を告げる日として機能し、それゆえ聖ゲオルギオスは春の豊穰神としても表象された〔菅原 2012〕⁽³⁾。そこから聖ゲオルギオスの水による癒しというイメージが生まれたと考えられるが、乾季と雨季が対照的に訪れるバルカン＝小アジア地域では、このイメージは増幅されたと考えられる。ブルガリアおよびマケドニアで採録された聖ゲオルギオスの竜退治のバラードでは竜が湖に住み着くのは唯一の水源の支配者としてであり、聖ゲオルギオスの竜退治は水の解放という象徴的意味を与えられている〔伊東 1988: 218-219；Миладинови 1861: No.38；Богданова и др. 1993: No.523, 524〕。

また中世ロシアのこの教会スラヴ語写本では聖ゲオルギオスははっきりと「死後も生き続けた」と語られ、聖ゲオルギオスの殉教の日に彼に祈祷を捧げるように王が命令する、という結末

になっている。つまりここでは聖ゲオルギオスはキリストではないにもかかわらず復活を果たした聖者とされているのである。この伝説が異端とされる理由もここにあると思われるが、聖ゲオルギオスの殉教伝説のヴァリエントでは彼は殉教の前に拷問で三度息絶え、三度蘇った、ともされている。また殉教伝説に後に付加されたと考えられるこの竜退治の伝説はふつう殉教前の出来事として聖者伝に挿入されているが、ヴァリエントによっては竜退治が殉教後のできごととされている場合もある [Веселовский 1880: 33, 50]。

聖ゲオルギオスと復活のイメージの結びつきは、4月23日という聖ゲオルギオス祭の日付と復活祭のそれとの近接によっても支えられている。そもそも春の農耕と牧畜の開始日として機能している聖ゲオルギオス祭は自然の復活のイメージと結びついているが、このことは復活祭の時期に歌われる東スラヴの儀礼歌ヴォロチェーブナヤ・ピェスニャ（Волочевная песня）で復活祭と聖ゲオルギオス祭が最も大きな祭りとして挙げられていることから伺える（Земцовский 1970: 320-332）。この中世ロシア語写本の竜退治伝説には既に民間暦の聖ゲオルギオス祭のイメージが投影されている可能性があるのである。

5. 巡礼靈歌における「聖ゲオルギオスの竜退治」

次にこの竜退治伝説がロシアの民間でどのように受容され、流布したかを知るために、口承の叙事詩である巡礼靈歌に描かれた竜退治伝説を見てみよう。巡礼靈歌はカレキ・ペレホージェと呼ばれる盲目の巡礼によって歌い広められた宗教的叙事詩である。その分布は同じ叙事詩のジャンルであるブイリーナと重なり合い、現在のカレリア、アルハンゲリスク、ヴォログダ、ムルマンスク地方といったロシアの北方地域である。ソ連時代にはその宗教的内容ゆえに研究が禁止され、海外でしか研究がなされてこなかったジャンルだが⁽⁴⁾、ペレストロイカ以降再び盛んに研究とテキストの公刊がされている。巡礼靈歌とここで訳しているのはロシア語で *духовные стихи* と呼ばれているもので、直訳すれば「宗教詩」という意味あいの術語だが、それを担った巡礼という特殊な社会集団を念頭に栗原成郎が創唱した訳語「巡礼靈歌」を筆者も用いている。

巡礼靈歌において「聖ゲオルギオスの竜退治」を扱ったものは数多くはない。19世紀においてはキルピーチニコフがその研究において八つのヴァリエントを挙げ [Кирпичников 1879]、ベッソーノフはそのアンソロジーに四つのヴァリエントを収録している [Бессонов 1862]。新しくはマルコフが1900年代に収集した二つのヴァリエントが最近『白海のブイリーナと巡礼靈歌』に公刊された [Марков 2002]。またソコロフ兄弟も16のヴァリエントを1920年代後半にカレリア地方で採集しており、これも最近公刊された [Братья Соколовы 2007]。またドブロヴォリスキーとコルグザーロフは1970年代に採集された二つのヴァリエントのテキストを譜例つきで公刊している [Добровольский, Коргузалов 1981: No.110, 116]。

5-1-1 巡礼霊歌のテキスト（1）

次に対訳で訳出したものは上述のベッソーノフの巡礼霊歌のアンソロジー『カレキ・ペレホー
ジエ（盲目の巡礼たち）』第2分冊に1862年に公刊されたもの（「エゴーリイと竜」«Егорий и
змей»）で、第120番の番号が付されている。採録地はシムビルスク県スィズラン郡レピエフカ村
である。同じテキストはセリヴァーノフ編のアンソロジー『巡礼霊歌』（1991年）[Селиванов
1991] に再録されており、テキストそのものはベッソーノフによったが、正書法その他のテキス
トの表記はセリヴァーノフに準じた。

ЕГОРИЙ И ЗМЕЙ

Во граде было во Антоние,
При царе было при Агее при Евсеиче,
При царице Оксинии,
Когда веровали веру истинную христианскую,
Тогда не бывало на Антоний-град
Никакой беды, ни погибели.
Когда бросили они веру истинную христианскую,
Начали веровать латинскую бусурманскую,
Тогда Господи на них прогневался:
Напустили на них змея лютого,
Змея лютого поедучего.
Выедает змей лютый
Все царство царя Агея Евсеича.
Тогда князья-бояра
На соймище собирались,
Соборы они соборовали,
И жеребьи закладывали:
Кому наперед зверю достануться
На съедение, на смертное потребление?
И царя они Агея Евсеича
На совет призывали,
Называли его товарищем,
И жребий за него закладывали.
Доставался ему резвый жеребий

「エゴーリイと竜」

昔アントニイの都であったこと
その時の皇帝はアゲイ・エフセイチ
その時の妃はオクシニヤ
民が真のキリストの教えを信じていた頃
その頃にはアントニイの都にはなかった
如何なる災いも、如何なる禍ごとも
民が真のキリストの教えを捨てた時
ラテンの異教の教えを信じ始めたとき
その時主は彼らに怒りを示された—
彼らに獰猛な竜を放った
獰猛な人食い竜を
獰猛な竜は食らおうとした
皇帝アゲイ・エフセイチの王国の全てを
そこで貴族たち公たちは
一堂に会した
会議を開き取り決めた
籤を引くことにした—
誰がまず竜の餌食になるかの籤を
誰が竜に食べられて死ぬかの籤を
そして皇帝アゲイ・エフセイチを
その会議に呼んだ
彼をわれらの仲間と呼んで
そして彼のために籤を引いた
すると皇帝にすぐさま籤が当たった

Ко лютому зверю на съедение,
На смертное употребление.
Тогда царь Агей Евсеевич
Пошел на свой на царский двор
Невесел и нерадошен,
Припечалимши, прикручинимши.
Его резвые ноги подгибаются,
Белыя руци опустилися,
Буйная головушка с плеча свалилася,
Ясны очи погубилися,
Сахарны уста помрачилися,
Белое лицо его приусмеркнулось,
На буйной главе его власы щетом стали.
Тогда увидела его молодая царица Оксинья,
Возговорила она ему таковые словеса:
«О сударь ты мой, царь Агей Евсеевич!
Когда ты, сударь, таков бывал?
Что ты идешь не по-старому,
Не по-старому, не по-прежнему,
Припечалимши и прикручинимши?»
Отвечал ей царь Агей Евсеевич:
«Ой ты еси, моя царица Оксинья!
Не знаешь ты ничего, не ведаешь,—
За наше великое согрешение,
За многое беззаконие
Наслал на нас Господи змея лютого,
Змея лютого, поедучего;
Выедает лютый змей все мое царство,
Царя Агея Евсеевича.
То со той поры царя-бояре
На соймище собиралися,
Соборы они соборовали,
И жеребья закладывали,

獐猛な竜の餌食になるという
食べられて死ぬという籤が
そこで皇帝アгей・エフセイエヴィチは
自分の王宮に向かった
心楽しまず嬉しくなく
悲しみと憂いに沈んだ
皇帝の早い足は折れ曲がり
白い両腕も垂れた
勇敢な頭も肩からうなだれた
明るい瞳も光を失い
甘い唇も黒ずみ
白い顔も暗くなった
立派な頭の毛は逆立った
するとそれを見たのは若き妃オクシニヤ
妃はこんな言葉をかけた
「おおわが主、アгей・エフセイエヴィチ帝！
こんなご様子をはじめてです、ご主人様
なぜ足取りが昔と違うのですか？
昔とは、以前とは違うのですか
哀しみと憂いに沈んで？」
それにアгей・エフセイエヴィチ帝が答える
「おおわが若き妃オクシニヤよ！
おまえは何も知らない、分らないのだ—
われらの大いなる罪ゆえ
数々の無法のゆえ
主がわれらに獐猛な竜を放たれた
獐猛な人食い竜を一
獐猛な竜はわが王国の全てを食尽すだろう
アгей・エフセイエヴィチ帝の王国の全てを
そこでその時皇帝の貴族たちが
一堂に会し
会議を開き取り決めた
籤を引くことにした

Кому наперед достанется
 К змею на съедение
 И на смертное потребление.
 И меня они, царя, на совет призывали,
 Называли они меня товарищем,
 И жеребье за меня закладывали;
 Доставался мой резвый жеребей
 Наперед мне идти
 К лютому зверю на съедение!»
 Отвечала ему царица Оксиния:
 «Не кручинься, мой друг, не печалься!
 Есть у нас с тобой чадо милое,
 Молодая Прекрасная Лисафета,—
 Она нашей-то веры не верует,
 И трапезу не трапезует,
 Она верует веру истинную христианскую,
 По-старому и по-прежнему,
 И святому Егорию Храброму.
 Предадим мы ее ко лютому зверю на съедение,
 На смертное потребление».
 Тогда же царь Агей Евсеевич
 Со царицею Оксиниею
 Приходили в палату в белокаменную
 Да где же пребывает молодая Елисафета.
 Возговорили они к ней такие словеса:
 «Ой ты гой еси, наше чадо милое,
 Молодая Прекрасная Елисафета!
 Умывайся ты, наряжайся во цветное платье,
 Подпояшь свой шелков пояс сорока пядень.—
 Уже замуж мы тебя просватали».
 Молодая Прекрасная Елисафета догадалась,
 Отвечала им таковыя словеса:
 «Осударь ты мой родной батюшка,

誰がまず順番にあたるか
 誰がまず竜の餌食になるか
 誰が竜に食われて死ぬかの籤を
 そして彼らは私を会議に呼んだ
 私を仲間と呼んで
 そして私の籤を引いた
 するとすぐさま私に籤が当たった
 なので私がまず行かねばならぬのだ
 獰猛な竜の餌食になるために！」
 皇帝に答えて妃のオクシニヤが言った
 「あなた、悲しまないで、嘆かないで！
 私とあなたとの間には愛しい子がおります
 若き麗しのリサフェータ—
 あの娘は我らが信じる教えを信じません
 共に食事もとりません
 娘は真のキリストの教えを信じています
 昔どおりに、かつての如く
 聖なる勇士エゴリーイを信じています
 娘を獰猛な竜の餌食に差出しましょう
 竜に食べさせ亡き者にしましょう」
 そこで皇帝アгей・エフセイェヴィチは
 妃のオクシニヤと共に
 若いエリサフェータの住む
 白石造りの宮殿へとやって来た
 皇帝と妃は娘に次のように言った—
 「おお娘よ、われらが愛し子よ
 若き麗しのエリサフェータよ！
 顔を洗いきれいな衣装を着なさい
 40尺のその絹の帯を締めなさい—
 我らはもうそなたの婚礼を整えた」
 若き麗しのエリサフェータは悟った—
 二人にこのように答えて言った
 「皇帝よ、わが実のお父様

Осударья родна матушка!
Слышит мое сердце,—
Не замуж вы меня собираете,
На смертный час вы меня соряжаете,
Ко лютому зверю на съедение,
На смертное потребление,
Предаете вы меня к смерти скорой!»
Тогда царь Адей Евсеевич
Берет ее за ручку правую,
Ведет ее во чисто поле.
Постановил ее близ синя моря
На крутым бережочке,
На сыпучем песочке,
И сам он грядет во Антоний-град.
Тогда молодая Прекрасная Лисафета
Оставалась единая близ синя моря,
На крутом берегу, на песке сыпучем;
Она плакала, зело рыдала,
Взирала очами на небо,
Призывала Бога на помощь,
И мать Божию Богородицу,
И святого свет Егория Храброго.
Из чистого далеча поля
Приезжал к ней Егорий Храбрый
На своем на осле на белым.
Возговорил он ей таковыя словеса:
«Ой ты гой еси, молодая Прекрасная Лисафета!
Что ты единая стоишь близ синя моря?
О чем ты плачешь, зело рыдаешь,
Взираешь ты на небо,
Призываешь Бога на помощь,
И Мать Божию Богородицу,
И святого Егория Храброго?»

皇后よ、生みのお母様！
わたしの心は気づいております—
貴方がたは私に花嫁衣装ではなく
経帷子を着せようとしているのです
わたしを獐猛な竜の餌食にするために
竜に食べさせ亡き者にするために
私をすぐ殺そうとしているのです！」
すると皇帝アдей・エフセヴィチは
娘の右手をとり
娘を開けた野原へと連れて行った
青い海のほとりに彼女を立たせた
険しい岸辺に
細かい砂の上に
そして自分はアントニイの都へと向かった
すると若き麗しのリサフェータは
青い海のほとり、険しい岸辺の上に
細かい砂の上にたった一人残された—
彼女は泣いた、さめざめと涙を流した
空を見上げ天をみつめた
神のご加護を請い願った
神のみ母である聖母に
そして輝く聖勇士エゴーリイに呼びかけた
すると開けた野の彼方から娘のもとに
騎馬の勇士エゴーリイがやって来た
白い驢馬に乗って
エゴーリイは娘に次のように言った
「おお若き麗しのリサフェータよ！
なぜ一人青い海辺に佇んでいるのだ？
何をひどく嘆き悲しんでいるのだ
何故空を見上げて
神のご加護を請い願っているのだ
神のみ母である聖母と
聖勇士エゴーリイに呼びかけているのだ？」

Тогда молодая Прекрасная Лисафета
 Не узнала святого Егория Храброго,
 Называла его добрым молодцем:
 «Вывел меня батюшка
 Ко лютому зверю на съедение,
 На смертное потребление,
 Предают они меня смерти скорой!»
 Речет святой Егорий Храбрый:
 «Ой ты, ты гой еси, молодая Прекрасная Лисафета!
 Садись ты, смотри в моей буйной главе пороха,
 А очми взирай на синее море.
 Когда синее море восколебнется,
 Тогда лютый змей подымется,—
 Ты скажи мне: Егорий Храбрый!»
 Тогда молодая Прекрасная Лисафета
 Садилась, смотрела в буйной главе пороха
 У святого Егория Храброго,
 А сама взирала очми на синее море.
 Синее море разливалось,
 Тогда лютый змей подымается,
 Переплывает змей через синее море
 Ко копытчику ко ослу белому.
 Тогда молодая Прекрасная
 Змея лютого испугалась,
 Не посмела разбудить Егория Храброго;
 Она плакала, зело рыдала,
 Оборонила свою слезу святому на бело лице,—
 От того святой просыпается.
 Сохватал он свое скипетро вострое,
 Садился на осла на белого;
 Он и бьет змея буйного
 В голову, во проклятые его челюсти,
 И сам речет Елисафете Прекрасной:

дагасеос時若き麗しのリサフェータは
 それが聖なる勇士エゴリーイとはわからず、
 エゴリーイに勇敢なお方と呼びかけた—
 「わたしを連れてきたのはお父様です
 獰猛な竜の餌食とするために
 わたしを食べさせ死に委ねようと
 父母はわたしをすぐに殺そうとして」
 すると聖なる勇士エゴリーイが言った
 「おお若き麗しのリサフェータよ
 ここに座りわたしの勇敢な頭の埃を
 拭いながら青い海を見張りなさい
 青い海が波立ったら
 その時竜が立ち現われる—そうしたら
 教えるのだ「勇士エゴリーイよ！」と」
 そこで若き麗しのリサフェータは
 聖なる勇士エゴリーイの傍らに座り
 勇敢な頭の埃を拭いながら
 青い海をしっかりと見張っていた
 青い海が沸き立つと
 すぐに獰猛な竜が立ち現れた
 竜は青い海を泳ぎ渡って来た
 白い驢馬の蹄の近くまで
 すると若き麗しのリサフェータは
 獰猛な竜に驚き怖れ
 勇士エゴリーイを起すことができなかった
 娘は泣いた、熱い涙を流した
 聖者の白い顔にその涙を落とした
 その涙で聖者は目を覚ました
 自分の鋭い錫を掴むと
 自分の白い驢馬にまたがった
 エゴリーイは荒れ狂う竜を打ち据えた
 頭を、呪わしいその顎を
 そして麗しのエリサフェータに言った

«Ой ты гой еси, молодая Прекрасная Лисафета!
Распояшь ты свой шелков пояс,
Свой шелков пояс сорока пядень,
Провздедай ты в его ноздри в змеевыя,
Поводай змея во Антоний-град!»
Тогда молодая Прекрасная Лисафета
Змея лютого убоялася:
Не распоясала свой шелков пояс,
Свой шелков пояс сорока пядень.
Тогда святой Егорий Храбрый
Распоясал сам шелков пояс,
Провздедает он его в ноздри змеевыя,
Он вручил змея молодой Прекрасной Лисафете.
Тогда молодая Прекрасная Лисафета
Повела змея во Антоний-град,
Приводила его на царский двор,
Воскричала она громким голосом:
«Ой ты гой еси, царь Адей Евсеевич
Со царицею со Оксиньею!
Ой вы гой еси, князья-бояре,
Христиане православные!
Бросьте вы веру латынскую, бусурманскую,
Поверуйте вы веру истинную христианскую,
По-старому и по-прежнему,
И святому Егорию Храброму!
Естьли вы не бросите,
Вы веру латынскую, бусурманскую,
Напушу я на вас змея лютого;
Поест он вас всех до единого,
И со старого до малого,
И царя Агея Евсеевича
Со царицею со Оксиньею!»
Тогда же царь со царицею

「おお若き麗しのリサフエータよ！
おまへの絹の帯をほどくがよい
その40尺の絹の帯を
この竜の鼻の穴に通しなさい
竜をアントニイの都に連れゆけ！」
だが若き麗しのリサフエータは
獐猛な竜に恐れ慄き
自分の絹の帯をほどけなかった
自分の40尺の絹の帯を
そこで聖なる勇士エゴリーイは
自ら絹の帯をほどき
それを竜の鼻の穴に通した
竜を若き麗しのリサフエータに委ねた
そこで若き麗しのリサフエータは
竜をアントニイの都に連れて行った
竜を王宮に連れて行き
娘は大声で叫んだ—
「おお、皇帝アデイ・エフセヴィチよ
その妃オクシニヤよ
おお、おまへたち公たち貴族たちよ
正教の民たちよ！
ラテンの異教の教えを捨てなさい
真のキリストの教えを信じなさい
昔のように、もと通りに
そして聖勇士エゴリーイを信じなさい！
もしもあなたたちが
ラテンの異教の教えを捨てないならば
わたしはあなたがたに獐猛な竜を放ちます
竜は一人残らず食い尽くすでしょう
老いも若きも
皇帝アゲイ・エフセヴィチも
その妃オクシニヤも！」
そこで皇帝も妃も

И все князья-бояре православные
 Воскричали громким голосом,
 Проливались горячи слезы:
 «Осударыня ты наша, матушка,
 Прекрасная Лисафета!
 Не пушай ты на нас змея лютого,
 Змея лютого поедучего.
 Бросим мы веру латынскую, бусрманскую,
 Поверуем веру истинную христианскую,
 По-старому и по-прежнему,
 Егорию Храброму!»
 Тогда молодая Прекрасная Лисафета
 Повела змея на гору на каменную,
 Постановила змея на камни,
 Проклинать стала змея с камнем;
 А сама градет во Антоний-град.
 Тогда царь Адей Евсеевич
 Со царицею со Оксиньею
 Воскричали громким голосом:
 «Ой вы гой еси, бояре, христиане,
 Ой вы гой еси, попы и священники наши!
 Спускайте гласы колокольные,
 Подымайте иконы местныя,
 Служите молебны честные,
 За Лисафетино моление,
 За Егория Храброго страдание!»
 Славен наш Бог, прославился! Аминь!

全ての正教の公たち貴族たちも
 熱い涙をさめざめと流し
 大声で叫んだー
 「我が主、母なる
 麗しのリサフェータよ！
 我らに獐猛な竜を放たないで下さい
 人食いの獐猛な竜を
 我らはラテンの異教の教えを捨てましょう
 真のキリストの教えを信じましょう
 昔のようにもと通りに
 勇士エゴーリイを信じましょう」
 そこで若き麗しのリサフェータは
 竜を岩山へと連れて行き
 そして石の上に据えた
 そして岩につないだ
 そして自分はアントニイの都に向った
 すると皇帝アゲイ・エフセヴィチは
 その妃オクシニヤと共に
 大きな声で叫んだー
 「おお、貴族たち、キリスト教徒たちよ
 おお、わが僧侶たち、司祭たちよ
 鐘の声どもを高らかに響かせよ
 この地の聖像画どもを掲げよ
 敬虔な祈りを捧げよ
 リサフェータの祈りに対して
 勇士エゴーリイの受難に対して！」
 我らが神は栄光に満ち、讃えられたり！
 アーメン！

注

- (1) 聖ゲオルギオス祭の民間暦における機能的意味については〔伊東 1994〕参照のこと。
- (2) ゲオルギオスのロシア語形はユーリイ Юрий, エゴーリイ Егорий である（〔岡本 2008〕参照）。ちなみにパステルナークの長編小説『ドクトル・ジヴァゴ』の主人公の名ユーリイはここに示したようにゲオルギオスのロシア語形であり、そこには聖ゲオルギオスの神話的イメージが影を落しているものと推測される（〔伊

東 1984] 参照)。

- (3) 聖ゲオルギオスの竜退治伝説に対する古代ペルシアの春の新年祭ナウローズの影響の可能性については[伊東 1988; Widengren 1965] 参照。
- (4) ソビエト時代におけるその例外的なものとしてはノヴィコフによる論文「巡礼霊歌の発展の問題について」[Новиков 1972] が、また同時代のソ連国外におけるロシア人による唯一の研究としてはパリでロシア語で出版されたフェドートフの著書『巡礼霊歌—巡礼霊歌に見るロシア民衆の信仰』[Федотов 1935] がある。

(＊文献表はまとめて本稿の(Ⅱ)の末尾に掲載する)

